



伝え聞く、  
藤原武智麻呂のこと  
〜「武智麻呂伝」より〜



川村  
優理

私は、延慶という名の僧です。

天平勝宝五年（七五三年）、鑑真和上さまが薩摩の国に到着なさった折には、唐の国より戻る大伴古麻呂さま一行の船の第二船に乗り込み、太宰府までご案内致しました。

私の役目は、訳語。通訳です。

若い頃、遣唐使船で唐に渡ったことがあり、唐では、鑑真和上にもお目にかかりました。それゆえ、和上が、太宰府から平城の都に入られるときにも、通訳を務めまして、そのおかげで、従五位という位と、位田を賜りました。

さてと・・・この度は、武智麻呂さまについてのお尋ねですとか。

武智麻呂さまのことは、よく存じておりますよ。小さい頃から、聡明な方でございました。

宇智野の里の前山寺についてですか？ そうです。あの寺は、武智麻呂さまが、建立なさいました。

★  
藤原の左大臣は、諱、本名を、武智麻呂さまといひます。

なにしろ、史さまの長子、一番上のお子さまですから、何不自由なく、お育ちになりました。

藤原不比等。大宝律令の編纂をなさり、平城京に都を移す中心となった右大臣。

あの、史さまです。

★  
史さまには、四人の男の子がおりました。

長男は、武智麻呂さま。

次男は、武智麻呂さまの一歳年下で、房前さま。

三男は、武智麻呂さまの十四歳下の、宇合さま。

四男は、武智麻呂さまの十五歳下の、麻呂さま。

女の子は、後に文武天皇の夫人となった宮子さま。聖武天皇の皇后となった安宿媛、光明子さま。長屋王に嫁いだ長娥子さま。橘諸兄に嫁いだ多比能さまがおられます。

藤原不比等さまの一家は、まさに、時代を制しておりました。

武智麻呂さまは、そうやって藤原家の力がどんどん大きくなっていく最中、父親の不平等さまが二十二才であった天武九年（六百八十年）の四月十五日、飛鳥、大原の邸宅で生まれました。

若葉の緑が鮮やかな季節で、幼い頃はその季節の名をいただき、たしか、茂り、栄えるというようなお名前であったと記憶しています。

お母さまは、媚子さまです。

斉明天皇や、

天智天皇の下で

大臣を務められた

宗我連子という方の娘ですが、

媚子さまは、一番上の武智麻呂さまと、二番目の房前さまを産み、まだ年若い間に、亡くなつてしまいました。

幼い武智麻呂さまは、血の涙が流れるほどに泣き崩れました。

「こんず」という重湯さえ、口に入れようとしません。

悲しみのあまり、自分も、死んでしまおうとしているのではないかと見えるほどでした。その頃からでしょうか。

武智麻呂さまは、外で活躍なさることはなく、長じて後も、政の世界からは、一歩引いて、学問の道を好まれ、弟の房前さまを、藤原家の跡取りと思い込んでいる役人たちも多いようでした。

武智麻呂さまは、のんびりとしていて、細かいことはあまり気にしない性格でした。からだつきは大きく、言葉づかいも、ゆっくり。

温厚で、すなおな方です。

いつも、静かに、書物を開いておられたと思います。

騒がしいことや、派手なことは、大の苦手で、皆と話をすることもそれほどありません。囲碁をして何日も過ぎたり、一晩中書物をひらいて、読んでいたり、

無言で心が通じ会えることに興味を持っておられました。

お母さまを早く亡くしたためか、親を亡くした子どもたちや、貧しい人々や、老人に、とても優しく接しておられました。

その武智麻呂さまが藤原家の立派な長子として世に知られるようになったのは、天武天皇の第五番目の皇子さまである穂積親王さまの宴に、貴族の家の優れた子弟ばかりが招かれたときでした。

その日。藤原家の若い貴族たちは皆、それぞれに、官位の出世を目論んで、いかに自分が優秀であるかというふうに、立派な衣類を身につけ、親王さまへのご挨拶は、ぬかりなく、華やかな集まりとなっていました。

ですが、武智麻呂さまは、相変わらずのようすで、社交は苦手。

宴席の片隅で、静かに座っておられます。見ていた私などは、もう少し、皆さんのように自慢話などなされればよいのと思ったほどでした。

ところが、宴うたげの主あるじである穂積親王ほづみしんのうさまは、そんな、武智麻呂むちまろさまのことがお気に召したの  
でしようか。

ついと立ち上がり、そこに集まった大勢の人々の前で、こんなことをおっしゃいました。

★

——「ここに集まった藤原氏の優秀な若者の中でも武智麻呂むちまろには、特に、普通とは違った優  
れたところがある。

『虎豹こひょうの駒こまは、文あやを成さずといえども、羊ひつじを食はむ意こころ有り。』と言われている。虎や豹の子  
は、特に教えなくても、羊を食すべる術すべを自みづずと心得こころ得えているものだ。

『鴻鵠こうこくの雛ひなは、翼つばさ備そなわらずといえども、四海しかいの心こころ有り。』とも言おう。

大きな鳥のヒナは、翼つばさがまだ弱い幼い頃にでも、世界の海を飛とぼうとするものだ。

此この児こは、必たいていず台鼎たいていの位くらゐに至いたらむか。

武智麻呂むちまろはきつと、おおきなことを成し遂げる地位を得ることであろう——

★

大宝二年たいほう（七八〇年）の正月。

武智麻呂むちまろさまは二十才になられ、訴訟ぎょうぶしょうを司つかさどる刑部省けいぶしょうに入いつて、判事はんじの職しやくにつきました。

人の訴うえを良よく聞きき、公平こうへいで、大きな審議しんぎも小さな審議しんぎにも、立派りっぺに審議しんぎなさっておられ  
ました。

法の番人ばんにんという職しやくは、父上ちちのうへの不比等ひひとうさまが大宝律令たいほうりつれいを整ととのえられる大きな力ちからであったかと存  
じます。

が、翌年しよねんの大宝三年たいほう（七八一年）四月。

武智麻呂むちまろ等らさまは病氣びやうきを理由りゆうゐに、この職しやくを辞やめられ、  
その一年後の大宝四年たいほう（七八二年）三月。

大学助だいがくのすけになりました。

大学助だいがくのすけとは、貴族の子弟きぞくたちが学まなぶ、大学寮だいがくりやうの次官じくわん。大学頭だいがくのかみを補佐ほそする立場たちばです。

都みやこが藤原京ふじわらのみやこに移うつったときから、学問がくもんはおろそかになっていました。

武智麻呂むちまろさまは、学校がくが大事だいじだと、おっしゃっています。

——夫それ学校がくは、賢才けんさいのつどう所ところにして、王化おうかの宗もととする所ところなり。

（学校がくは、天皇てんかうを補佐ほそできるすぐれた人々ひとびとが集まる場所ところで、

天皇てんかうの政治せいぢにとつて最も大事だいじな場所ところである）

国くにを理おさめ家おきを理おさむるは、皆聖ひじりの教おしえに頼よる。

（国くにをおさめ、家おきをおさめるのは、すべて学問がくもんの教おしえに従したがうべきだ）——

大学だいがくに、武智麻呂むちまろさまの大改革だいこうかくが始はじまりました。

学校がくには優すぐれた学まな者ものを集あめ、優すぐれた若者わかしよを集あめて、講義かうぎをし、学問がくもんの殿堂てんどうを作り上げたの  
です。

あちこちから、学まなぶ人が雲くものように集あまり、星ほしのように列りをなしました。

景雲三年けいうん（七〇六年）七月。

藤原武智麻呂ふじわらむちまろさまは、二十七歳にじゅうしちさいで、大学だいがくの学長がくちやうにあたる大学頭だいがくのかみになりました。

★ 養老三年（七一九年）正月。

藤原武智麻呂公は、三十九才で正四位になり、

この年、儲后もうけのみみである首皇子おびのおうじが元服なさいましたので、七月より、

首皇子をお世話する東宮傳とうぐうふを命じられました。

皇子さまは、後の聖武天皇となられた方です。

武智麻呂さまは、皇子さまのお住まいになっている春宮ひつぎのみやを訪れ、

首皇子おびのおうじさまに、まず、文学を学ばれることをお勧めしました。

文学とは、「懐風藻」などの漢文のことを言います。

首皇子は、このときから、文学や教養を大事にし、天子の位に就かれた後も、常に良い

政まつりごとをなさつて、仏法を尊んで、人々を導かれましたが、皇子が仏法を学ぶにふさわしい

場所として、宇智郡うちのおりの吉野川沿そいに、

巨大な前山寺まきやまてらを建てられました。

吉野は、首皇子おびのおうじの父君、文武天皇も、曾祖父にあたる天武天皇も、曾祖母にあたる持統天皇も足繁く通われた土地ですが、

吉野に入られる前に、一夜を過ごせる場所が、この前山寺でもありました。

★ その翌年。

四十才になって父上が亡くなり、藤原武智麻呂は、政治の世界の中央に出ます。

強大な藤原一族を束ねる藤原南家の祖の本拠地たほとして、前山寺も、その栄華を極めていたのです。